

## 被災地ガイドの利用者は何を学ぶのか — 東松島市・奥松島観光ボランティアの会のガイドに宛てられた手紙から —

佐藤 翔輔\*

### 1. はじめに

東日本大震災の被災地では、語り部、被災地ガイド、展示など、当時の状況や被災体験を伝承することを目的にした活動が盛んに行われている<sup>1)</sup>。これらの活動の大きな目的の一つは、利用者に震災のことを知ってもらい、防災・減災に関する学びを得てもらうことにある。

東日本大震災で被災した東松島市では、東松島市観光物産協会が受入れのコーディネートを行い、奥松島観光ボランティアの会が現場案内を行う被災地ガイド活動が行われている。同会は、従来、観光地の美化活動や観光ガイドを務めていた「奥松島観光ボランティア」である。被災地ガイドの活動は、市外から訪れる人から、被災地視察のガイドの要望が高まったことを受け、同会によって震災発生から1年後の2012年4月に始まった活動である。2016年2月時点、同ガイドの利用者は37,063名が利用している。

著者は、東日本大震災で被災した東松島市で、ガイドを行っている奥松島観光ボランティアの会と、その活動の後方支援を行っている東松島市観光物産協会、東松島市図書館、JICA 東北から、次のような相談を受けた。「ガイドの利用した全国の方から、お手紙をいただく。せっかく送ってもらった大事なお手紙。きちんと保存したい。」というものであった。そこで、著者は、東松島市図書館、JICA 東北とともに、手紙のデジタルアーカイブ化(電子媒体)の構築と、その一部を使った記録集(紙媒体)の作成を支援した。

本稿は、この東松島市の語り部ガイド宛て

に届いた「手紙」を分析することで、東松島市の語り部ガイドの利用は、何を感じ、何を学んだのかを明らかにすることを試みる。語り部ガイドの方々が、以上のような活動をされている理由は様々あると考えるが、少なくとも共通するものとして、「東松島市で起きた東日本大震災のことを知ってもらいたい」という思い、その奥には「これから起きる災害への備えや対応の助けになれば」という願いがあることが推察される。その上では、利用者が何を感じたか、何を学んだかを知ること、語り部ガイドの方々にとって、これまでされてきた活動をふりかえるための重要な情報になると考えた。

### 2. 分析対象：手紙

2015年5月時点において、同会に送られてきた手紙は125件であった。学校などの団体であれば、1度に複数の手紙が送られてくる。そのため、データベース化に当たっては、これらを分割したものを「感想文」という単位にした。感想文を単位にすると、全部で409編となった。図1に送り主が団体・個人の内訳、図2に分かる範囲での職業の内訳を、手紙(件数)、感想文(編数)を単位にして集計したものを示した。それぞれで、団体(図1)、学校(図2)が最も多く、手紙の送り主が、修学旅行や研修で利用した児童・生徒が手紙の多く占めることが分かる。

図3に手紙(件数)を、図4に感想文(変数)を単位にして、送り主の地域を同定して集計したものを示す。いずれも山形県が最も多い。山形県は東松島市のある宮城県と「隣の県」であり、そもそもの利用者が多いことが影響していることが考えられる(図3, 図4)。手

\*東北大学災害科学国際研究所

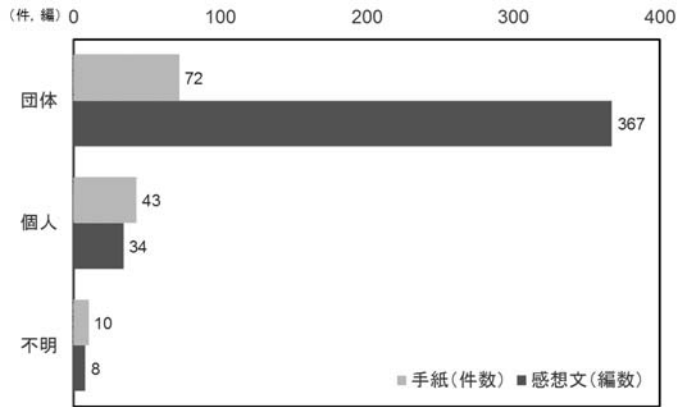


図 1 送り主の内訳 (団体・個人の別)

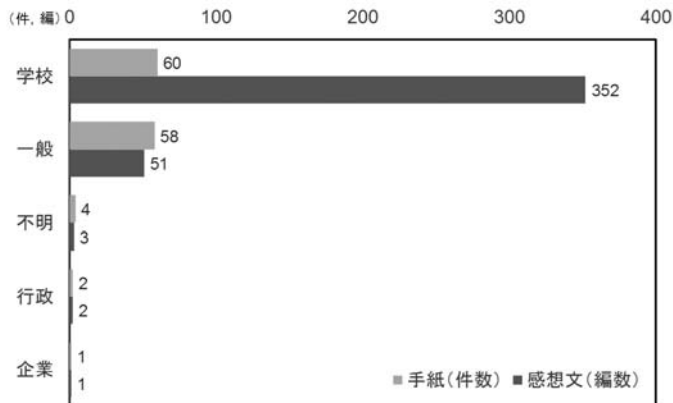


図 2 送り主の内訳 (職業)

紙単位では、静岡県が多く、南海トラフ地震津波の想定地域からの高い関心が伺える。感想文単位では、岩手県、埼玉県、青森県が多い。北は北海道、南は沖縄県まで、また、海外（アメリカ）からも手紙が届いていたことが分かる。

1つの感想文の中には、複数の「内容」が含まれている。語り部ガイドの利用が感じたこと、学んだことを読み取るには、これらを分けて分析する必要がある。そこで、まずは、感想文を一つ一つ読み込んで、内容が分かる最小の単位に文章を分割し、これを1レコードとするデータベースを作成した。これを単位テキストとし、分析を行った、単位テキス

トは1,349個となった。

### 3. 分析

内容を単位とする文章を用いて、内容分析<sup>3)</sup>によって、各単位テキストに対してアフターコーディングを行い、ラベルを付した。その結果を集計したものを表1に示した。表1では、種類（ラベル名）の数の降順で示しており、併せて比率、降順の累積比率も示している。

上位3つは、語り部へのお礼（No.1「語り部さんが詳しく震災の話をしてくれたことへのお礼」）、復興への願い（No.2「被災地の復

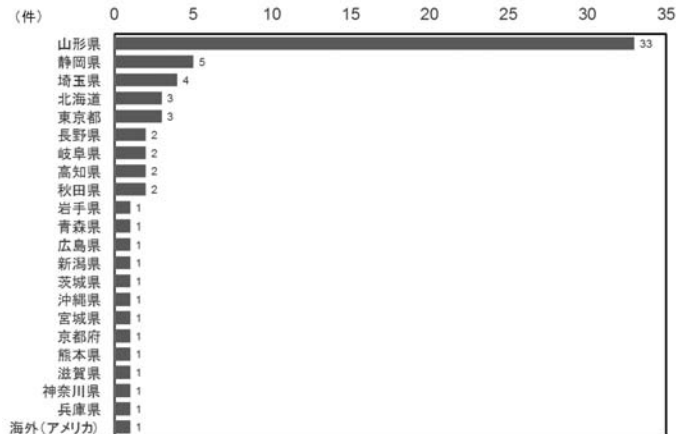


図3 送り主の内訳（地域，手紙単位）

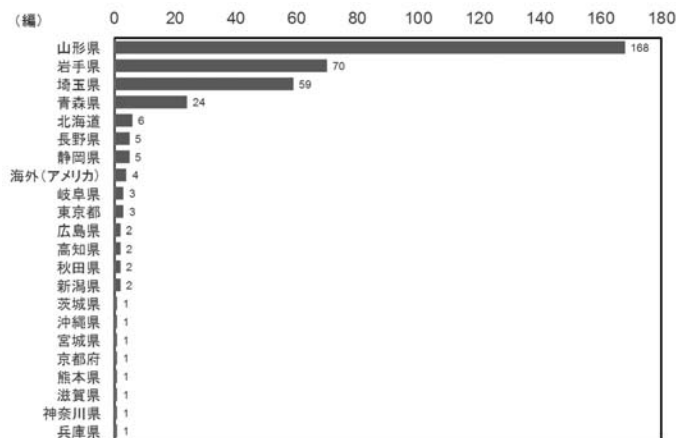


図4 送り主の内訳（地域，感想文単位）

興を祈り、被災者を応援する言葉」)、語り部さんへの応援 (No. 3「語り部さんを応援する言葉」) であった。内容分析の結果、その内容が63種類あるなかで、この3つだけで全体の35.6%を占めている。この上位3つは、言わば「枕詞」や「締めの一語」として、いずれかがすべての感想文中に見られるため、数が多いのは容易に理解できる。

注目すべきは、次以降に多い内容のものである。これらは、津波の恐ろしさ、「実際の」被災状況や被害の大きさ (No. 4「語り部さんの話により、津波による被害の恐ろしさを実感できたこと」、No.6「語り部さんの説明により被災状況がよく分かったこと」)、被災

者は「今もつらい」ということ (No. 7「被災者が今でも辛い思いをしている事を知り悲しく思ったこと」)、まだ復興は途中であること (No.8「まだ復興の途中だということが分かったこと」)、命の大切さ (No.9「命の大切さを学んだこと」)、などが語り部ガイドの利用者にとって「直接的な学び」になったことが分かる。特に、ダブルクォーテーションを付けた部分（“実際の”，“今もつらい”）は、被災現場を訪れながら語り部ガイドの話を聞いたからこそ、感じ取ることができたものであると考える。さらに、ボランティアや支援をしたいと思ったこと (No.5「自分に出来るボランティア・支援をしていきたいと考えた

表 1 東松島市の震災語り部ガイド宛に送られた  
利用者からの手紙の内容分析の結果 (単位テキスト)

No.	感想文の内容	計	比率	累積比率
1	語り部さんが詳しく震災の話をしてくれたことへのお礼	269	19.9%	19.9%
2	被災地の復興を祈り、被災者を応援する言葉	112	8.3%	28.2%
3	語り部さんを応援する言葉	99	7.3%	35.6%
4	語り部さんの話により津波による被害の恐ろしさを実感できたこと	90	6.7%	42.3%
5	自分に出来るボランティア・支援をしていきたいと考えたこと	73	5.4%	47.7%
6	語り部さんの説明により被災状況がよく分かったこと	72	5.3%	53.0%
7	被災者が今でも辛い思いをしている事を知り悲しく思ったこと	61	4.5%	57.5%
8	まだ復興の途中だということが分かったこと	47	3.5%	61.0%
9	命の大切さを学んだこと	47	3.5%	64.5%
10	実際に被災地を訪れ被害の大きさを実感したこと	43	3.2%	67.7%
11	被災時の体験	46	3.4%	71.1%
12	海岸林を見て津波の被害に驚いたこと	38	2.8%	73.9%
13	がれきりがリサイクルされているということを初めて知ったこと	31	2.3%	76.2%
14	普通に暮らせることが幸せだと気づいたこと	23	1.7%	77.9%
15	協力し合いながら前向きに復興しようとしている被災者に勇気づけられたこと	21	1.6%	79.5%
16	震災のことを忘れないよう次世代へ語り継いでいきたいと考えたこと	20	1.5%	80.9%
17	津波により亡くなった人のことを考え悲しく思ったこと	16	1.2%	82.1%
18	仮設住宅には多くの問題があることを知ったこと	15	1.1%	83.2%
19	語り部さんへのお礼として写真やお菓子などを送ったこと	15	1.1%	84.4%
20	語り部さんからの頂き物に対するお礼	15	1.1%	85.5%
21	初めて被災地を訪れたこと	15	1.1%	86.6%
22	生きていることが幸せだと気づいたこと	13	1.0%	87.5%
23	様々な事を感じ考えた機会となったこと	12	0.9%	88.4%
24	実際に被災地を訪れる事で震災について学べると思い申し込んだこと	12	0.9%	89.3%
25	地震が起きたら海から遠く高い所へ避難することが大事だと学んだこと	11	0.8%	90.1%
26	卒業式が行われていたことで犠牲者が増えたことを知り悲しく思ったこと	11	0.8%	91.0%
27	御礼の手紙が遅くなった謝罪	10	0.7%	91.7%
28	震災から立ち直り活気がある被災地を見て復興が進んでいると実感できたこと	8	0.6%	92.3%
29	油断せず防災対策をしていこうと考えたこと	8	0.6%	92.9%
30	被害状況を見て早く復興してほしいと願ったこと	7	0.5%	93.4%
31	亡くなった被災者の分も生きようと思ったこと	7	0.5%	93.9%
32	自分よりも他人の事を大事にする「利他の心」を学んだこと	6	0.4%	94.4%
33	文化祭で震災について発表したこと	5	0.4%	94.7%
34	当時、報道された震災の様子に驚いたこと	5	0.4%	95.1%
35	震災支援に感謝する語り部さんが印象に残ったこと	4	0.3%	95.4%
36	被災時刻に止まった時計が印象に残り震災遺構として残してほしいと思ったこと	4	0.3%	95.7%
37	避難所で過ごした人の不安な気持ちや不自由な生活について考えたこと	4	0.3%	96.0%
38	頂いた花の種を大事に育てたいと思ったこと	4	0.3%	96.3%
39	語り部さんが自分達の地域に来てくれることを望んでいること	4	0.3%	96.6%
40	話を聞くまで、震災の記憶が薄れていたこと	5	0.4%	97.0%
41	ボランティア活動に参加できて良かったと思った事	3	0.2%	97.2%
42	救助隊の活躍が心に残ったこと	3	0.2%	97.4%
43	他者を助けようとした人の話が印象に残ったこと	3	0.2%	97.6%
44	津波は1回でなく、何度も押し寄せてきたこと	3	0.2%	97.9%
45	野蒜小学校の体育館が避難場所となりたくさんの方が避難したことが印象に残ったこと	3	0.2%	98.1%
46	がれきは人々の生活が津波に流されてきたものだと思ったこと	3	0.2%	98.3%
47	助け合うことが大事だと学んだこと	3	0.2%	98.5%
48	ボランティア活動することにより被災地のことをより知ることが出来たこと	2	0.1%	98.7%
49	津波から避難し助かった人の話が印象に残ったこと	2	0.1%	98.8%
50	被災地へ送った感想に被災者が感動していることに驚いたこと	2	0.1%	99.0%
51	復興のための支援金を増やしてほしいと思ったこと	2	0.1%	99.1%
52	たくさんの方がボランティアに参加していると知り驚いたこと	1	0.1%	99.2%
53	津波対策の取り組みを学んだこと	1	0.1%	99.3%
54	農業の復興が遅れていることを知ったこと	1	0.1%	99.3%
55	復興のための取り組みを知ったこと	1	0.1%	99.4%
56	絆の大切さや命の尊さを学んだこと	1	0.1%	99.5%
57	語り部さんの前向きな言葉に励まされたこと	1	0.1%	99.6%
58	再建場所に被災地を選んだことを疑問に思ったこと	1	0.1%	99.6%
59	他県に避難した被災者がいた事を知ったこと	1	0.1%	99.7%
60	被災者同士ではげましあった話に感動したこと	1	0.1%	99.8%
61	震災で亡くなった方を悼もうと思ったこと	1	0.1%	99.9%
62	被災者と同じ状況に置かれた時の対処方法考えたこと	1	0.1%	99.9%
63	風評被害があることについての憤り	1	0.1%	100.0%
	計	1,349		

こと)、次世代に語り継ぎたいと思ったこと (No.16「震災のことを忘れないよう次世代へ語り継いでいきたいと考えたこと」)、なども上位にあり、利用者の意識に変化をもたらした可能性が伺える。

#### 4. おわりに

本稿は、東松島市の語り部ガイド宛てに2015年5月までに届いた125件の「手紙」を分析することで、利用者が、何を感じ、何を学んだのかを明らかにすることを試みた。その結果は次のようにまとめられる：

- 1) 手紙の内容は、枕詞や結びの言葉としての語り部へのお礼・応援、復興への願いが、全体の3割超を占めていた。
- 2) 手紙の内容から、語り部ガイドを利用したことで、被災状況や被害の大きさを実感として受け止めたこと、被災者はまだつらい状況にあること、復興は途中であること、命が大切であることといった、直接的な学びが利用者にあることが確認された。
- 3) さらに、一部の回答では、自身が何らかのボランティア活動に参加する意向や、語り部ガイドを利用したことで知った内容・教訓を他に伝えたいという意向も確認された。

「東松島市で起きた東日本大震災のことを知ってもらいたい」、「これから起きる災害への備えや対応の助けになれば」という語り部ガイドの意図は、以上のような手紙の分析において、そのような結果を利用者にもたらし

ている事例が、質的に一部あることが読み取れる。今後は、以上のような影響・効果を量的に把握していきたい。

#### 謝辞

本稿での分析は、東松島市図書館のご提案で機会を得たものである。奥松島観光ボランティアの会、東松島市観光物産協会、JICA東北の関係の皆様にご感謝申し上げます。本研究は、課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業・実社会対応プログラム「効果的・持続的な災害伝承を目的とした拠点構築手法のモデル化と実践的研究」(研究代表者：佐藤翔輔)より一部助成を頂いた。データベース化ならびに分析においては、東北大学災害科学国際研究所・早坂真紀技術補佐員のサポートを得た。

#### 参考文献

- 1) 佐藤翔輔：「災害を伝える」活動の最新動向—「災害かたりつぎ研究塾」の合宿活動をもとにして—、口承文芸研究、No. 38, pp.42-51, 2015.3.
- 2) 東松島市観光物産協会：奥松島観光ボランティアの会、<http://www.okumatsushima-kanko.jp/sightseeing/index.html#guide>
- 3) Klaus Krippendorff: Content Analysis - An Introduction to Its Methodology, Sage Publications, 1980. (クリッペンドルフ：メッセージ分析の技法, 三上俊治, 椎野信雄, 橋元良明 (編), 勁草書房, 1989.)

